

性愛的人間の存在論的考察  
——森崎和江『第三の性——はるかなるエロス』をてがかりに——

教育科学専攻・人文社会系教育領域

学籍番号 218M014

氏名 菱田梨央

2022年2月10日提出

## 目次

はじめに——現代フェミニズムにおける「主体」の相対化

第一章 『第三の性——はるかなるエロス』の予備的考察

第一節 他者についての体験

第二節 関係性としての産

第三節 エロスと存在の回復

第二章 『第三の性——はるかなるエロス』における性愛概念の分析

第一節 性の原風景

第二節 親和と加害のエロス

第三節 性愛の不可能性

第三章 『第三の性——はるかなるエロス』における「存在の回復」の思想

第一節 交換ノートという形式

第二節 性の思想から産の思想へ

おわりに——存在論的性愛へ

参考文献

## はじめに——現代フェミニズムにおける「主体」の相対化

自己決定が女性の解放の一つの側面に過ぎないことを、ケアを論じるフェミニズムはすでに証明している。近代リベラリズムの産物である自由と平等を保障された主体は、元来フェミニズムが欲したものであった。だが、女性の主体的な自己決定を検討するとき、疑念が生じる。一番わかりやすい例が中絶である。中絶を行うとき、私はもうひとりの私であり、他者である胎児を傷つけることになる。ここでは、主体的という概念が無効になる。主体的に決定するとは、私の尊厳を守ることであったはずなのに、私が崩壊してしまうのである。近代的な主体から私を語るとアポリアに行き着く。このことから、フェミニズムは表象からの解放を言説として築き上げたが、それだけでなく、実存の次元での解放を検討する必要があるのである。

実存の次元での解放とは何を意味するだろうか。それは、「私である」という地点からではなく、「私がある」という場所から問いを立てることを意味する。近代的な主体や自我ではなく、私と私であって他者でもある存在が会合する場所から私を捉える。たとえば上記の中絶の例は、私と胎児が会合する場として母体を捉えることによって、胎児を傷つける私と私に傷つけられる胎児の存在がようやく見えてくる。他者との関係を築く場そのものを注視することで、これまで傷つき、不安にさらされていた誰かの存在をはじめて問うことができる。それが、実存の次元での解放の一步となるのである。

インターネットが普及し、容易に他者と関係することができるようになった現代こそ、目の前の具体的な他者との関係からフェミニズムを批判する視点を形成していくべきだと考える。そこで本稿では、根源的なコミュニケーションである性愛関係から、実存的な個の解放を問うた詩人・作家の森崎和江の『第三の性——はるかなるエロス』（1965年）をてがかりに、女性の実存の解放の思想を検討したい。

『第三の性——はるかなるエロス』は三一書房より1965年に刊行された。その後、河出書房文庫（1992年）版では著者によって加筆修正が加えられ、河出書房新社（2017年）では森崎和江の本格的な研究書を執筆した水溜真由美の解説が添えられた。『第三の性』は、森崎が実際に「無名通信」のメンバーと行った交換ノートが題材であり、本文は森崎自身がモデルになった「沙枝」と森崎の友人がモデルになった「律子」による対話の形をとる。往復書簡の記録のようでありながら、タイトルである「第三の性——はるかなるエロス」を探究する対話の構成になっている。病床に臥している者同士でなにか共同作業を、という沙枝の誘いから交換ノートは始まる。病と、女という性によって社会から疎外された心身の欠如感について、二人は語り合う。しだいに、既婚者であり、子供のいる沙枝と、未婚者であり、子供のいない律子の間には分断が生じてくる。だが、この分断が対話の鍵となり、真の対話が拓いていく。

加納（2003年）によると、それまでは草の根の作家であった森崎は1970年代に「ブレイク」した。それは、1年間に4冊の著作を出版したという作家としての実績、そして、ウ

一マン・リブにおいて「〈主体としての女〉を模索」するための先達の存在となったからである。当時、上野千鶴子に影響を与えたほか、北海道のリブグループが「森崎和江研究会」を立ち上げたり、長野のリブ合宿で森崎の分科会が設けられたりした。

しかし、こうした森崎評価には変化が生じる。松井（2020年）によれば、森崎の再評価と先行研究は2000年代以降盛んになるとされる。たとえば、2008年に藤原書店から森崎の著作集が出版されたことを挙げている。森崎研究が増加した理由については述べられていないが、研究対象となった背景には、1991年、金学順が日本軍の慰安婦だったと名乗り出たことを発端に始まる、いわゆる「従軍慰安婦問題」をポストコロニアルやフェミニズムの視点から、どのように受け止めるのかの模索があった。軍隊という国家機能の中枢を担うシステムの犠牲となりながら、被害の性質上、自国でも沈黙を強いられてきた「従軍慰安婦」と、植民二世として炭鉱町や漁村を渡り歩いた森崎の存在は、国民国家の包摂の原理から零れ落ちたという点で共通していた。国民国家による同一化の暴力性を、植民二世という出自を経て感じとっていた森崎は、常に社会の周縁者として生き、周縁者同士の繋がりを注視してきた。ポストコロニアルやフェミニズム研究者は、そのような森崎の思想に国家を媒介としない社会的連帯の可能性を見出したのだと考える。

先行研究は、2000年から2020年代まで大きく二つの傾向に分けられる。一つは、森崎の思想を手がかりに、個から全体を問う研究である。水溜（2000年、2003年、2013年）、玄（2018年）、西（2018年）、松井（2020年）、今村（2004年）、茶園（2013年）は、社会において、分断された個人は、他者とどのように繋がることのできるのか、という視点で森崎を論じている。これらの研究はいずれも、個人から出発し、社会的連帯へ向かっていく方法を模索するという傾向を見せる。

他方、結城（2011年）と小林（2013年）は、人間がいか生きて、死ぬのかという哲学的な問いの次元で森崎を取り上げる。特に小林は、「〈産む／生まれる〉という事実の自覚・思想化」が、「遺伝子研究等の飛躍的發展によって生命誕生が以前にも増して男女の性愛を不要とする現在」において「不可欠な警鐘」として産の思想化を重要視する。これらの研究では、生命の連関としてのいのちという総体から、人間個人の在り方を問うという点で、全体から個の在り方を問うという傾向がある。

本稿では、先述した中絶の例のように、私と他者の存在がそれまでとは異なる形で立ち現れるコミュニケーションの場として性愛関係を捉えたい。それは、後者の先行研究のように、関係から個の在り方を問うという点で、後者の傾向の立場を取る。本稿の中心的な問いは、性愛というコミュニケーションから、私と他者の関係を捉えなおすことである。先述したように、『第三の性』の文体は往復書簡の形式をとっている。そのため、往復書簡のやりとりに着目することで、沙枝と律子の存在が顕になっていく過程を私と他者の関係性を捉えなおす場として提示したい。また、それははじめに述べた具体的な他者との関係から私を解放していく実践となる。これまで先行研究で論じられてきた森崎のテキストに現れる性愛という場、いのちが私を生きているという話、個をつらぬく場所の論理が、性愛と対話のなか

に現れると考えることによって、ケアの倫理につらなる、実存の次元で女性の解放を問うフェミニズム思想として『第三の性』を読み解きたい。

本論の構成は次の通りとなる。第一章は『第三の性——はるかなるエロス』の背景となった森崎の体験から、『第三の性』が書かれる契機となった森崎の問題意識を検討することで、『第三の性』における性・産の思想の基礎概念を明らかにする。第二章では、第一章で浮かび上がった基礎概念が、『第三の性』において性・産の思想として論理化することで、森崎にとって何が女性の実存の解放なのかを明らかにする。第三章では、沙枝と律子の対話、特に律子に着目し、森崎が提示した実存の解放の思想が具体的に現れていることを明らかにする。第一章から第三章を通して、森崎が提示した性・産が人間の存在を回復していく思想であると意味づけることによって、すべての性にひらかれたフェミニズム思想を構築する一助としたい。

## 第一章 『第三の性——はるかなるエロス』の予備的考察

本章の目的は、幼少期から 1960 年代までの森崎の歩みを手がかりに、森崎を『第三の性』の執筆へと赴かせた背景を明らかにすることである。第一節では、朝鮮での体験が、森崎が「非所有の所有」という自己を否定する視点を培ったことを指摘し、第二節では、引き揚げ後の出産と弟の自死が、私であって他者でもある存在と出会うという、性・産の思想化への出発点となったことを指摘する。第三節では、炭鉱夫たちとの関わりのなかで発見したエロスが『第三の性』として思想化されたのは、森崎の存在の回復が懸かっていたからであると感じたい。

### 第一節 他者についての体験

森崎は 1927 年に朝鮮慶尚北道大邱で生まれた。朝鮮で中学校の校長をつとめた父の子供で、植民二世であった。17 歳までを朝鮮で過ごし、日本で敗戦を迎えた。森崎が朝鮮について詳細に語るのは、朝鮮を再訪した 1968 年以降である。したがって『第三の性』執筆時は、朝鮮の体験は主題化されていない。だが、『第三の性』において描かれる、他者関係の様相の背後には、朝鮮での体験が影響していると考えられる。そこで本節では、森崎と朝鮮、森崎から見た父と朝鮮を検討することで、森崎の他者との関係について独自の視点を明らかにしたい。

幼少期の森崎は、家事手伝いの朝鮮人・オモニやネエヤに慈しみ、育まれた。植民二世の森崎にとって、「朝鮮を語ることは重たい」<sup>1</sup>行為だった。森崎には、オモニやネエヤに対して、自分を肯定し養ってくれたという愛情の実感とともに、植民者という支配的な立ち位置から愛情を貪ったという罪の意識があった。振り返ると、ネエヤたちの話す言葉も、彼女たちの名前も、森崎はもはや記憶していなかった。<sup>2</sup>子供だったから、知らなかったから、では許されることができないという深く、暗い罪悪感を詩に読み取った、詩誌『母音』の主宰者・丸山豊は「和江さんは原罪意識が深いね……」と言葉をかける。つまり、『第三の性』執筆時にも、朝鮮人に対する罪の意識は、森崎の思考に垣間見えていたのである。また、森崎は朝鮮で過ごした当時から、「十七歳まで、朝鮮人の幼児から老人にいたるまでのまなざしに集団姦を感じなかったことは一度もな」<sup>3</sup>く、「一瞥で殺す、つまり勝負のまなざしで、私の性を突かんとする」視線を感じとっていた。森崎は強烈な“他者”の視線を意識しながら育ったのである。

他者についてのイメージは、朝鮮人に養われ育ったという親和性と、植民者として搾取していたという加害性が織り交ざったものであった。そして、そうしたイメージを相対化する視点として、森崎の父親が存在していた。1938 年に森崎の父・庫次は、慶州中学校の初代

1 「朝鮮断章・1——わたしのかお——（1968 年）」『ははのくにとの幻想婚』、現代思潮社、1970 年。

2 同上、214 頁。

3 同上、215 頁。

校長に任命される。その当時の父の姿が、『非所有の所有——性と階級覚え書』の冒頭に記される。ここでは、森崎の朝鮮をめぐる思考、父の言葉、朝鮮人らしき少年が抽象的、断片的に描かれている。そのなかで、日本人的な同質の共同性を共有しない森崎は、「しま」、ここでは共同体の意味で用いられており、共同体内の人間の感覚からすると、「ゼロ」にすぎなかった」と述べる箇所がある。「ゼロ」とはどのような状態であるのか。次の引用は、森崎の存在の不確かさを吐露する記述である。

わたしにいっぼんの樹がほしい。それがわたしであるような……

わたしをとりまいた彼女たちの民族語に、噛みあう民族語を、わたしは持っていない。便宜で使っているにすぎない。彼女の髪にわたしはいた。それ以外、わたしに何があるだろう<sup>4</sup>。

当時の森崎は、森崎の周りにいたオモニやネエヤの使う民族語のような、自身の存在を担保する何かを持ち合わせていなかった。森崎にとって日本語は、「便宜で使っている」にすぎず、存在を確かなものにしなかった。そのため森崎は「彼女（オモニたち）の髪」のなかにいる「わたし」という身体的な部分でしか、自身を把握できなかつたのである。よって森崎は、他者との関係性でしか「わたし」を語ることができず、関係以前に存在しうる確固たる私を持ち合わせなかった。よって森崎は「ゼロ」なのである。ここには、私とは何者だろうか、という森崎の問いが垣間見える。「ゼロ」にすぎない森崎と対比的に父の姿は描かれる。森崎の父は、「ゼロ」ではなく、そして「ゼロ」であろうとする」「又、「ゼロ」であろうとするが」「ゼロ」ではない<sup>5</sup>という。森崎の父は植民者・日本人としてではなく、「リベラリスト」という個人として、朝鮮人と関係しようとした人物である。だが、教育とは象徴的な同化政策のひとつであり、植民地における教師の仕事は、朝鮮人を日本語によって矯正し、日本人に同化させることだった。教師である父は、たしかに朝鮮人の教え子からもリベラリストだと言われていた。しかし、同化政策の直接的担い手である教師という点で「ゼロ」ではない。

日本に引き揚げたのち、森崎は日本の女たちの疎外状況を目の当たりにした。女たちは、森崎と同様に「私」を表現することから疎外されていた。森崎の「ゼロ」であった体験は、「非所有の所有」において4つの「所有」という言葉のもとに概念化する。4つの「所有」概念とは、「私」の世界への関係の仕方である。具体的には、世界を秩序づける権力に対する関係の仕方である。ここにおける権力とは社会を序列化し、統制しようとする力である。

---

<sup>4</sup> 森崎和江『非所有の所有——性と階級覚え書』、現代思想社、1971年、7頁。

<sup>5</sup> 金泉中学校に転任が決まった際に、庫次が「おとうちゃんは前と後ろから銃を向けられている……」と言ったことを森崎は思い出している。転任の理由ははっきりとは明かされていないが、慶州中学校が元々朝鮮人のための私立学校として設立を意図されたこと、朝鮮総督府と慶州中学校の設立者の取次が庫次だったことから、総督府と朝鮮人の板挟みの状態であったと推測できる。

1つ目は被所有の私有で、権力に自ら同一化していくことで、利益を得る在り方である。2つ目は被所有の所有で、権力に自己を同一化していることに気づかないまま、世界に特権性を持つ在り方である。3つ目は非所有の私有で、反権力的な在り方をするも、それがかえって権力性をもってしまい、結果的に権力に自己を同一化させてしまう在り方である。4つ目は非所有の所有で、世界に対して絶えず自己の在り方をずらし、権力を相対化しようとする在り方である。森崎と父・母は、2つ目の被所有の所有として、コスモポリティックで、根無し草的態度が批判の対象とされる。つまり、世界に対して「無」であるという態度表明となり、そして、現代に生きる女たちは非所有の所有を表明することでしか、女たちの疎外は止揚されないという。女たちの疎外とは、以下のように示される。

女たちは「私」というとき、さわさわと鳴る葦の集落のごとき音をひとすくいしている。自己は他者の集合体だ。外側へむかって自分を暴発させようとするとき、内部の葉群は切先へむかって結集する。もしその発現への欲望を一本の茎を抜くように、本来分別されない内的自他をふるいわけて外界が引くときは、私＝女はより深い侮蔑にさいなまれる、そして多かれ少なかれ女たちは誰でもその裂かれた傷を握って生きる<sup>6</sup>。

森崎は、女たちを葦の集落に例える。ある女が「私」というとき、その「私」の背後には、葦の集落のように無数の「女たち」が存在する。どういうことなのか。それは、「女」たちの認識する「私」は、その内実を女たちの生活状況にみあったものとして形成している。「それは疎外の共通認識の共有」であり、「そこにある原理の内面的小単位化」が「私」だという。現代の出来事で例えるならば、「#MeToo 運動」が挙げられる。「#MeToo 運動」において「私」と自身に起こった体験を語る時、また運動を支持するとき、語る「私」は同じ痛みを抱えたと想像しうる不特定多数の女に共感を示している。それが「疎外の共通認識の共有」である。また、森崎は「知的所有のトラスト」という言葉で、女たちを疎外する社会の知的枠組みを表現する。つまり女たちは「生活状況」にみあった「私」を形成するが、それは「知的所有のトラスト」に適応しないために、「疎外」を感じるのである。したがって、本来分別されない内的自他をふるいわけるとは、そのようにして「疎外」された自分以外の無数の抽象的な「女たち」の群れから、「私」だけを区別されることを指す。つまり、女たちの疎外状況から切り離された「私」が「女」として扱われることにより、「裂かれた傷」を受けることになるのである。

森崎は他者から見れば父と同様「ゼロ」ではない。それは被所有の所有として自身の態度を批判したことからもわかる。だが、森崎の内面は、確固とした形でアイデンティティが根づかなかった。したがって森崎は、「女」という自分の一部を道標とし、「女」に共感していくという仕方でも「裂かれた傷」を握りつづけることができた。それは、常に「疎外」を直視していこうとする態度である。そうした態度があったために森崎は、非所有の所有という、

<sup>6</sup> 森崎和江『非所有の所有——性と階級覚え書』、現代思想社、1971年、116頁。



絶えず自己の置かれる位置を否定的に捉えざるをえない、止場の契機に拓かれていたのである。

## 第二節 関係性としての産

前節では、森崎の朝鮮での体験が、他者との人間関係から生じる自己の権力意志への批判意識として現れることを指摘した。本節では、森崎の妊娠体験と弟の自死が与えた影響について検討することで、森崎を産の思想化に向かわせた動機を明らかにする。

1953年3月、森崎は第一子を出産する。その2か月後、弟が自死する。この二つの契機が性と産の思想化に向かわせる背景の一つになったと考えられる。二つの出来事についてまとまった文章で語るのは1970年代に入ってからであり、当時は妊娠については「ほねのおかあさん」、弟の自死については「悲哀について」という詩で表現された。つまり、森崎のなかで論理的な言葉では表現しがたい体験として存在していたことが予想される。

まず、一つ目の契機である出産についてみていく。森崎は、妊娠時に一人称「わたし」が使えなくなってしまう。

ある日、友人と雑談をしていました。私は妊娠五か月目に入っていました。笑いながら話していた私は、ふいに、「わたしはね……」と、いいかけて、「わたし」という一人称がいえなくなったのです<sup>7</sup>。

そして、言葉としては「わたし」と発音するが、それはそれまでの「わたし」とは同じものではなく、「わたし」としての統一感はゆれ動く。このように、胎児を抱えて生きる自己の表現法の欠如を感じとるのである。森崎は、既存の言葉では表現できない胎児を孕んだ自己内の変化を、「ほねのおかあさん」<sup>8</sup>で表現している。「くちびるがうまれたよ ももいろのあせ かわいいおしゃべり 夏空をきらきらかける むきだしの熟れたおしゃべり」という一段落から始まるこの詩を書いた背景には、「自分がももいろの汗と、骨の部分とに、分離して感じとれる思い」<sup>9</sup>が生じていたという。ここで注目したいのは、胎児がまったくの他者として描かれているのではなく、森崎自身が「分離」したと描かれている点である。

<sup>10</sup>「くちびるがうまれたよ」と語りかけてくる胎児は、私でもあり、他者でもある。この感

<sup>7</sup> 森崎和江『いのち、響きあう』、藤原書店、1998年、23頁。

<sup>8</sup> 「ほねのおかあさん」（原題「貝の唄」として森崎和江個人詩誌『波紋』二号、1956年8月）森崎和江『森崎和江コレクション——精神史の旅1・産土』、2008年、藤原書店、238-240頁。

<sup>9</sup> 森崎和江『いのち、響きあう』、藤原書店、1998年、28頁。

<sup>10</sup> 森崎はのちに、女性が女として完成するには、男性がもつ”単独な我“を”目指すだけでは片手落ちであると次の引用で語る。「けれども私は、女性が“単独な我”といったものを完全に行使することが出来るようになることが、女性としての最終的な目的だというふうにはどうしても思えないのです。じゃあどうなるのかといいますと、そういった”単独

覚は、ケアの倫理を論じるフェミニストたちによって、中絶の選択を迫られた女性の葛藤をめぐる議論においても論じられる<sup>11</sup>。森崎の場合は、ここで倫理ではなく、女性の自己の感覚の言語表現のなさが、存在論と結びついている点が重要である。森崎は「わたし」の統一感のゆれ動きという不安を、胎児が語りかけてくる声を聞くことによって表現しようとした。

次に、二つ目の契機である弟の自死について触れたい。

和んべ、甲羅を干させてくれないか。／ぼくにはふるさとながない。女はいいね、何もなくても産むことを手がかりに生きられる。男は汚れているよ<sup>12</sup>。

森崎の弟・健一は1953年5月22日に栃木の森の奥にある教会で自死したと、森崎自身が作成した年譜にある。生前、彼は早稲田大学で学生運動に参加していた。『第三の性』からは、自分の故郷がない／同一化できるものがないという存在の不安定さから、様々な活動に取り組むことで「人間親和の空間」を求めていたことが読み取れる<sup>13</sup>。森崎の弟についての語りは、父親ほど前面に出てこない。1970年代に入り、家族についての随筆のなかでぼつりぼつりと語られるも、自死の直前の上記の弟の語りがほとんどを占める。森崎にとって弟を語ることは、重たい行為であることがうかがえる。第一節で確認したように、自身を「ゼロ」であると感じていた森崎も弟と同様に「ふるさとながない」と感じていた。そうであれば、森崎と弟の間には、「産む」という体験が大きな差異として横たわっていると考えざるを得ない。自分が根をおろすことができる何かを得ることができなかった弟から見て、森崎は「産む」体験を通じて、根をおろすための手がかりを得たのである。

「わたし」という一人称の揺らぎは、森崎の存在を不安定にさせるという点から、言語化することが必要であった。そして、「産む」という体験は、弟と自身の生死を分けた一つの要素だった。以上の森崎の体験から推測できることは、森崎にとって産は異なる他者との関係を生む契機となっていたことである。一つは単独であると思っていた「わたし」が「わたし」であり他者でもある「わたし」と関係をひらいたという意味において、もう一つは出産を通して、生活感情をまるで共有できないという点で、他者である日本に根をおろす手がかりを得たという意味においてである。「ぼくにはふるさとながない。女はいいね、何もなくても産むことを手がかりに生きられる」と繰り返し記されるのは、日本人であるという意識の

---

である我“といったものを、社会的にもそれから個人生活の上でも、十分に発揮できて、そしてまた、それと系統のちがった何ものかの充足が必要だというふうに思う。「女性の意識について」『ははのくにとの幻想婚』、1970年、254頁。

<sup>11</sup> 小西真理子「中絶における女性の倫理的葛藤と責任：ギリガンによるケアの倫理の視点から」『侍兼山論叢』、第52号、大阪大学大学院文学研究科、2018年、7-8頁。

<sup>12</sup> 森崎和江『森崎和江コレクション 精神史の旅 5回帰』、藤原書店、2009年、350頁。

<sup>13</sup> 森崎和江『第三の性——はるかなるエロス』、三一書房、1965年、122頁。

希薄さがもたらす根無し草の感覚を、森崎も強く共感していたからであろう。私の不確かさから救われんために、私のなかの他者をすくいとる産の思想を『第三の性』において語らざるを得なかったのである。

### 第三節 エロスと存在の回復

本節の目的は、『第三の性』において探究される「エロス」が論じられるようになった背景を、性の思想化の契機となった谷川雁や炭鉱町の人々との関わりから明らかにすることである。本節では、まず、森崎の思想に影響を与えた谷川雁との出会いから別離までの出来事を通じて、森崎が当時どのような問題意識を持っていたのかを捉えたい。次に、そうした問題意識のうえで、炭鉱夫たちから見出したエロスがどのような意味を持ちえるのか検討する。

森崎は先述した丸山豊主宰の詩誌『母音』を通じて、谷川雁と知り合う。森崎は谷川との詩誌上のやりとりにおいて、「私は女の言語や感覚の革新には、男性が目を閉じて神秘的領域にふみ込むようにして下さる事よりも、社会的合理性で処理して下さる事よりも、一層身近く、個々の問題として、個体と個体が具体的にふれてゆくことが先決だと思ったものでした。そして初めて、友愛や同志愛という言葉が生命をもってくるのではありますまいか」と訴えた。個々の問題として、個体と個体が具体的にふれてゆくこと、つまり、観念による抽象的な女への理解よりも、男女の具体的な関係から、協同で思想を現出させていくことを訴えているのである。この訴えから、炭鉱夫たちの文字通り生身の労働と性愛の場でのぶつかりあい、森崎が心惹かれるのも納得できる。森崎は谷川とともに1958年頃から炭鉱会社のある中間町で暮らし、炭鉱夫たちの生活を知る。1959年に『サークル村』で「スラをひく女たち」を連載する。1961年に連載したものをまとめて理論社から『まっくら』を出版する。谷川の理論重視の運動の方針に違和感をおぼえ、『無名通信』を創刊し、両者の思想的立場の違いが明確になっていく。森崎は、谷川が退職金闘争に勝利することを優先させ、仲間内の強姦が組織の思想の欠如ではなく、単なる「破廉恥罪」として処理したことを厳しく批判した。森崎は事件のショックから体調を崩し、性交渉不可能となる。そして、この事件が決定的な別れ道となり<sup>14</sup>、1964年、谷川は去った。

以上の谷川との関係は、森崎にとってのエロスを論じるにあたっての背景となっている。森崎は『無名通信』創刊号で、「道德のオバケを退治しよう——ヘソクリ的思想をめぐって」と題して、次のように語る。

---

<sup>14</sup> 大正行動隊とは、大正鋼業株式会社が業績悪化にともない閉山を決定したのち、退職金をめぐり争った谷川雁主導の組織である。森崎は強姦殺人事件が起きると、今すぐ性について組織内で話し合いをすべきだと谷川に訴えたが、谷川は組織の一体感に亀裂を生じさせることを恐れ、訴えを退けた。

わたしたちの呼び名に、こんな道徳くさい臭いをしみこませたのは、家父長制（オヤジ中心主義）です。その弊害から脱けようとして、女の崇りがつくられてきました。が、女の力を崇めることで家父長制はやぶられているでしょうか、また、男の家父長制をとりぞくことで、女たちは解放されるのでしょうか<sup>15</sup>。

組織優位な運動の論理に、女たちの言葉を届けるには、女たち自身で自身を説明することが必要だと森崎は考えた。これは谷川への批判としても読める。女を理想化すること、家父長制を破壊することだけでは女の解放に至らない。森崎にとって「解放」とは、「自分をとぎしている殻を、わたしたちの手でやぶること。それは被害者が、権力にたいして加害者になるとき」<sup>16</sup>である。「非所有の私有」も一見するとこれに当てはまる。だが「非所有の私有」は、「婦人運動」における母性の賞賛など、男女の不平等を女に権力性を付与することで解決しようとする在り方であって、体制の引き写しとなってしまふ。したがって、「非所有の所有」的態度によって、絶えず自身と世界の問題を否定的に捉えていこうとすることが必要なのである。加害と被害の問題を転覆させ、その問題を否定しつづける。

谷川との関係からは、エロスが存在の回復と結びつかなかった。だが、エロスが存在の回復のモチーフとなる契機が、炭坑町にはあった。森崎は炭坑町に来て、電気やガスに頼らない生活を営みながら、「ここには内側からぱちっと割れているような、あふれんばかりのエロスと力」があったと記している<sup>17</sup>。また、森崎は、女坑夫たちの「語り」を求めることで、戦後の近代化とともに失われたように感じ続けていた「寂寞感」から「救われたかった」という<sup>18</sup>。森崎は「語り」から「表現し定着させることの重要さと等量の、その昇華へのあこがれ」を見出している。「語り」を聞くことについては、「語ってくださったあなたの人生とその教えとを生かす世を求めつづけます」という意味があるとする。このような記述から、森崎にとって「語る」という表現行為には、語り手の痛みを昇華するという、存在の回復のモチーフが萌している。ただし、「語り」についての森崎の考えは、1992年に書かれた文章であるため、「スラをひく女たち」を連載していた時期にどれだけ「語る」ことの重要性を自覚していたかは定かでない。だが、先述したように、朝鮮からの引き揚げ後、森崎

---

<sup>15</sup> 『無名通信』は、森崎和江を中心に、1958年から61年まで刊行していた同人誌。『無名通信』、第一号、1959年8月、1頁。

<sup>16</sup> 同上、2頁。

<sup>17</sup> ここで引用したものは、1977年に三一書房より刊行された『まっくら』のあとがきである。1977年には、坑夫たちの姿を明晰な言葉で描き出している。「後山たちはもうのっぴきなならない捨て身の構えで働きくらしていました。それでも子を産みたい欲望をもち、自分を主張したい意地をもっていました。生活のぜんぶが、人間的なものの抹殺であるようなぎりぎりの場で、労働を土台として、その生を積極的に創造しようとしてきました。働くことを生活原理とし、理念としはじめた後山たちには、どんづまりという感覚のうしろに、なにか「始点」というようなえたいのしれない感動がうずきはじめてのです森崎和江『まっくら——女坑夫からの聞き書き』、2021年、岩波文庫、303頁。

<sup>18</sup> 森崎和江「〔付録〕聞き書きの記憶の中を流れるもの」、2021年、岩波文庫、306頁。

が弟と同様「ふるさとながない」と感じ、自身を存在せしめる何かを欠いていたことは確かである。女坑夫の「語り」から見出す存在の回復のモチーフは、『第三の性』における沙枝と律子の交換ノートを通じた「語り」の背景となっている。

「非所有の所有」と「語り」は、感性的な部分での共鳴に共通点がある。「非所有の所有」は、世界との関係の仕方を絶えず否定的に捉えていくことであったが、そうした態度をもって他者と関わる時、そこには、感性的な部分の共有を軸にした関係の構築があらわれる。なぜなら、「非所有の所有」以外の在り方は、いずれも権力性に従属する在り方で、秩序を維持する理念によって連帯が保たれるからである<sup>19</sup>。炭坑夫たちは、過酷な生活環境のなかで苦楽を共有することで生活を安定させていた。森崎はそこに「エロスと力」を感じとった。こうした点に、女たちの解放のきっかけとなる可能性を森崎は見たのではないか。『第三の性』における交換ノートを通じた「はるかなるエロス」の探究は、以上の背景によって成り立っていると考えられる。

## 第二章 『第三の性——はるかなるエロス』における性愛概念の分析

本章は、前章で明らかにした『第三の性』の理論的支柱となる3つの視点、すなわち、(1) 何にも安住しない「非所有の所有」の視点、(2) 「私」が「私」を相対化する視点、(3) 他者と共感することで「存在の回復」をする視点が、性愛論としてどのように現象しているのかを明らかにすることが目的である。第一節では、森崎の性のイメージをテキストから読み解くことで、『第三の性』において性が他者関係から規定されるものであることを明らかにする。先述したように、『第三の性』は交換ノートを通じて「はるかなるエロス」を探究する試みであった。そこで、第二節では『第三の性』において、「エロス」が具体的に何を意味するのかを明らかにする。第三節では、前章で検討した「存在の回復」のモチーフが、性愛関係においても現れていることを明らかにする。

### 第一節 性の原風景

本節では、第7回ノートにおける沙枝の性感の形成過程のエピソードを検討することで、『第三の性』における性のイメージを明らかにすることである。まず、沙枝／森崎独自の性の捉え方で基盤となる、「異性への遠心性」について検討し、性を個人間ではなく、男と女という総体の間で考えていることを指摘する。次に、沙枝と自然風物との関係を検討し、性が他者の「無名」を尊ぶ親和と、私から他者への「名づけ」の加害の両側面を持っていることを明らかにする。

沙枝の性のイメージにおいて最も独自のものは、性が人類の意識に先行して所属している「自然性」であると捉えている点である。沙枝の性的な他者との関係の原風景には、自然風

---

<sup>19</sup> たとえば、被所有の私有は家父長制に、被所有の所有はリベラリズムに、非所有の所有はフェミニズムに従属する人々を思い浮かべると想像がたやすい。

物との関わりがある。沙枝は自然風物を操作可能な対象として見るのではなく、関係性を築く他者として見ている。たとえばアカシアを「イデエというより存在の重層」としている点からも、機械的で操作可能な自然という観念ではなく、有機的で動的な、生命の躍動を有する他者存在として捉えているのである。それらのアカシア、真冬の裸木、ひろい麦畑と沙枝の「対応」について、次のように表現される。「蜜をなめたり、葉っぱをじゃんけんでちぎったりしながら」、「わたしのなにかが、その群生のいきれと交換していることを、おしつぶされんばかりに実感する」。他者としてのアカシアとの関わりから沙枝は「対応の感動」をおぼえる。沙枝はアカシアと何を交換し、何に感動したのか。他の自然風物との関わりも参照しよう。早朝の空の色彩のうつろい、真冬の裸木の「針のような枝先まで」にわたる「どくどくと」した「脈打」ちと、「そこへ湧きあがっていく樹液の気配」に息をつまらせる描写は、男性器の脈打つ様を彷彿とさせる。さらに、麦畑との対応では、そこに「男っぽさ」を感じ取る。これは単にセックスのメタファーではない。沙枝は自然風物たちの生命が湧いてくる在り様を感覚的に把握し、その生命の運動それ自体に感動をおぼえたのである。したがって、アカシアと交換した「わたしのなかのなにか」は、沙枝から湧きあがってきた生命の運動である。ここで、「なにか」としか表現できないのは、意識によって名づけられるものではないことが示唆される。ここからわかることは、沙枝にとっての性感は、名づけえない感覚を汲みとる行為から得られるものである<sup>20</sup>。

また、沙枝の性のイメージは、「異性への遠心性」が基盤になっている。「異性への遠心性は、どうもあわい特定者と、それからたくさんの異性のむれというふうに、二重になって」いる。つまり、沙枝の性のイメージは「特定者」と「異性のむれ」、すなわち非特定者と二重になっている。「遠心性」とは、「たくさんの異性のむれ」から「遠心性」によって「特定者」が分離していく様子を表現していると思われる。つまり森崎にとって異性は、目の前の他者だけではなく、森崎が体験してきた「異性」的なものの集まりであり、その感覚的なものが凝縮した個体が「特定者」として現れる。「おれだけが男だ」「わたしだけが女であとは犬のくそ」と語る者を「みみっちい」と評するのは、目の前の異性も異性のむれの文脈のなかにあると感じる森崎の性の感覚に拠る。性愛関係においてはこの点を妥協し、目の前の異性と異性のむれを非連続的だと捉える点が「みみっちい」のである。沙枝にとって、目の前の具体的な他者である特定者と、抽象的な他者の群れである非特定者の両方が必要なのである。

そうした感覚で捉えた最初の「あわい特定者」に、「おへそ」を巡って喧嘩した男の子がいる。彼は、「女にいちばん大切なものなんだと思う？」と沙枝に尋ねて、答えは「おへそ」だと明かす。沙枝は、「仰天したけど、体がじんとした。そして、また、ふきだしたくなった」と、心身で彼の答えを受けとめる。なぜ大切なのかというと、男の子は「人間のおへそは女のおへそとつながっている」からだと説明する。沙枝は「ふうん、こいつ、楽しい子だ

---

<sup>20</sup> 森崎和江『第三の性』、三一書房、1965年、35頁。

な」と思い、「あの時の身体的な感動は、(特定者との間で) わたしがとらえた性的な感覚」だという。

沙枝にとって男の子はなぜ「楽しい子」であり、「性的な感覚」抱かせた存在なのか。「女にいちばん大切なもの」について、父親は「精神の自由」、母親は「指でさわったら病気になるからいけませんよ」と「女にいちばん大切なもの」の持論を各々語るが、沙枝は「なんとまあ、教育者の親をもっていたということは心のこりなことでしょう」「これまたなんと衛生学的な性教育だったでしょう」と、両親の意図は汲むのだが共感を示さない。二人の回答は、沙枝を性と他者の関係から遠ざけるものであったからだ。つまり、両親は沙枝を抽象的な性に留まらせようとした。また、この男の子の怒りは、沙枝が「産む」ことを女性の身体に限定したからであるとも考えられる。これらのことから、『第三の性』における性と産は、性別を問わず、他者との関係を生じさせる契機として描かれているのである。

最後に、沙枝は女学校で青年教師や上級生、他校の男子学生との関わりを通じて、具体的な性の知識、経験（「愛なしに行為が可能」であること、結婚、受精の仕組み、同級生の妊娠、同性愛、痴情のうらみ）<sup>21</sup>を知る。その後、裸木に「逢いに」いっても、「裸木への感動は、悲哀のこもった憧憬のような、また観念そのもののような傾向」を帯びてしまう。<sup>22</sup>それまでは何かに意味化される前であったものが、「観念」、まさに意味そのものとして沙枝には映るようになる。これは、無意識の領域に存在した性への親和が、性の知識や経験を通じて、社会・文化的な性関係として意味化されてしまったために、裸木への感動が変質してしまったのではないか。名づけえぬ者同士の関係が、学生の経験を経て性愛的なものに意味づけられてしまったのである。したがって、沙枝のいう「男っぽい〈あの洞〉」が「人間の意識作用がもっているところの自然への加害性と、背中あわせになっている自然への親和性」<sup>23</sup>であるというのは、名づけえないもの、人間から湧いてくる欲動を「自然への親和性」と呼び、それを「意識作用」によって意味づけてしまうことを「自然への加害性」と呼ぶのである。

ここから、「異性」という異なる他者の群れは、遠心性の中心となる自己と異性の関わりによって、その都度変化を受ける柔軟性をもった観念といえる。つまり森崎にとって異性とは目の前の他者というより、森崎の前意識に働きかける感覚的なものの集まりである。「おれだけが男だ」「わたしだけが女であとは犬のくそ」<sup>24</sup>と語る者を「みみっちい」と評するのは、目の前の異性も異性のむれと無縁でないと感じる森崎の性の感覚に拠るものだと考え

<sup>21</sup> 森崎和江『第三の性』、三一書房、1965年、39-41頁。

<sup>22</sup> 同上、42頁。

<sup>23</sup> 「わたしの感覚がとらえた男っぽい〈あの洞〉は、人間の意識作用がもっているところの自然への加害性と、背中合わせになっている自然への親和性ではないかしら」。この〈あの洞〉とは、「不特定多数の異性群—異性の総体—が感覚にとらえられている。特定者はたんに妻問者であって、彼が出てきたところの、もっと男っぽく根源的なあの洞」と『第三の性』34頁で述べていることから、男たちの総体と同義であると考えられる。同上、38頁。

<sup>24</sup> 森崎和江『第三の性』、三一書房、1965年、198頁。

る。ここで重要なのは、この感覚を性愛関係においても妥協せず持ち続けようとする点である。森崎が違和感を抱き、『非所有の所有』で糾弾するのは、性愛関係においてはこの点を妥協し、目の前の異性と異性のむれが非連続的だと受け入れてしまう点である。

それまでは何かに意味化される前であったものが、「観念」、まさに意味そのものとして沙枝には映るようになる。これは、無意識の領域に存在した性の親和が、既存の知識や経験を通じて、社会・文化的な性関係として意味化されてしまったために、裸木への感動が変質してしまったのである。名づけえぬ者同士の関係が、学生の経験を経て性愛的なものに意味づけられてしまったのである。したがって、沙枝のいう「男っぽい〈あの洞〉」は男そのものではなく、意味以前のイメージなのである。森崎は、人間の「意識作用」には「自然への加害性」と「自然への親和性」があると考える。名づけえないもの、人間から湧いてくる欲動を「自然への親和性」と呼び、それを「意識作用」によって意味づけてしまうことを「自然への加害性」と呼ぶのである。ここには、人間の性には人間たちが意識では把握できない領域があり、その領域に既存の名づけを回避する自己や他者を見出す可能性があるのではないかという問いかけがある。森崎／沙枝はこうした性の在り方も人間の性質として受け止めようとした。この点に森崎の独自性がある。次節では、この性の原理を人間関係から検討する。

## 第二節 親和と加害のエロス

本節では、『第三の性』において、性の親和と加害の関係からエロスを論じる。現代思想においてフロイトは、エロス、すなわち性の欲動が意識の下層部から突き上げてくる衝動的なものであると主張し、人間は理性によって制御できない無意識なるものがあることを私たちに提示した。フロイトの捉えるエロスは、個人の行動を説明する独我的なエロスであるといえる。それに対して森崎は、エロスを共存在的に捉える。森崎によれば、エロスが人間の原動力となるのは、性の親和と加害が「しっかりと結ばれて噴きあがる」ときである。性愛とエロスの違いはなにか。性愛は関係性を表すために用いる。ではエロスと情欲は同義で用いているか。微妙に違う。たとえば情欲は欲望と同義である。エロスは、「存在の回復」とともに用いられる。たとえば、「自己の存在を回復させたいという全的なエロスの振動」という表現から、エロスとは欲動であるといえるだろう。

森崎は、エロスには性の親和と加害を結合させるはたらきがあると考え。この場合、親和と加害とは性愛関係における現象である。親和とは、「存在がたがいにとらえあつた個へ全面的に奪回しがたい性交渉の形而上的裸形を、互がそれぞれよびおこし与えあつたところの共同に責任を負う意識空間として肯定しあおうと」することをいう。それは「性の親和でもありやさしさ」でもある。「他者をそして自己を、存在として回復させんとするところの全面的な交換」を「愛」と呼ぶ。それは異質な他者との調和である。また、性は「親和への志向性をやぶろうとしてくる力に対する加害性」をもち、「やぶろうとしてくる力」は「単独支配の原理」である。また、親和と加害は、「愛とたたかい」とも言い換えられている。



この並列は、1970年に出版される『闘いとエロス』とも重なる<sup>25</sup>。そしてエロスは「個への回復志向」と「複数にして単一である共有空間」いう矛盾を接合する。

たとえば加害には次の例がある。大正行動隊内で起きた強姦殺人事件について議論するよりも、組織の維持を優先した谷川雁への森崎の不信は、同質的な共同性を目的化することへ向けられている。この谷川の判断は、組織の絆を保持するために、一人の女の死に真正面から向かうことなく、「強姦殺人事件」として記号化して扱った。それは、女を客体化・他者化することで、共同性や同質性を保とうとするホモソーシャルと重なる。また、谷川の「俺の知らぬところで組織を指揮している」という言葉に表れているように、森崎が炭鉱町の女たちと『無名通信』を発刊し、外に出て活動することを快く思っていなかった。谷川は森崎との関係においても、自己への同一化を求めた。そこには、他者を他者として気遣う余地はなく、単独者原理が働いている。

また、親和には次の例がある。閉山になった炭鉱の一軒に「お嫁さんがきた」ときの、「近所の青年や若い亭主たち」が「あたかも自分のふところへきたかのように」、「のぞきでなく、評価でなく、あふれるような笑顔」で迎えていたというエピソードがある。「お嫁さん」が来たことによって、「わあっとたかまっている自分に誰ひとり心づかぬあたかさは感動的」だったという。だが、この青年や若い亭主の「お嫁さん」への親和は、ホモソーシャルにおける女性の客体化とどう異なるのか。ホモソーシャルにおける女性の客体化、他者化は集団の絆を深めることを目的とする。だが、青年たち各々はのぞきや評価でなく、すなわち容姿や性格や家柄を問うことなく、「お嫁さん」の存在をただ肯定しているのである。

このような親和と加害がうまく噛み合ったときに、存在の全面的な交換が行われる。なぜなら、他者への親和だけでは自己の欲動を無視することになり、性愛関係に展開しない。加害だけでは、独りよがりとなってしまい、自慰行為に終わる。そのため、親和と加害がうまく噛み合うとは、他者の存在を気遣いながら、互いの存在を肯定していくコミュニケーションのことを指す。だが、相矛盾した二つの目的を大真面目に達成しようとするれば、単独者原理に振れてしまうだろう。したがって、他者の存在が入り込む余地が必要になる。それゆえに沙枝は、そうしたコミュニケーションを試みる様子を「子供が水遊びをするよう」に戯れるようなもので、「水遊び」をたのしもうとし、その「はかなさ」を味わおうとすると表現するのだろう。この戯れのなかで、矛盾する二つの側面はエロスへと止揚していくのである。

### 第三節 性愛の不可能性

第一節・二節を通して、性が具体的なものから抽象的なものへと転化していくこと、転化する際は性の加害性が働いてしまうこと、性の親和と加害をエロスが接合することを確認

---

<sup>25</sup> 『闘いとエロス』（1970年、三一書房）は、筑豊炭田に関わる労働運動の資料の記録と、森崎モデルの「契子」と谷川モデルの「室井」が炭鉱町に移住してからの出来事とをフィクションを織り交ぜながら、組織の論理と人間の感性を対比的に描いている。

した。第三節では、性愛には所有と表現の二つの面があることを検討し、森崎の性愛論が存在の回復を目的としていることを明らかにする。

『第三の性』では、律子が所有欲と愛が切り離せないという本音を吐露するのに対して、沙枝は「人間個体の原基体と全面的に捕捉しあえる他の異性個体なんぞありはしないでしょう？」と述べている。律子の言うように、愛が他者を私の存在のすべてにしていまいたくなるような、同一化の欲求を来すものであることは、一般論として頷けるものである。では、沙枝の言う全面的に補足しあえる他者が存在しないと考える背景には、どのような性愛像が描かれているのか。また、それは、森崎の基本的な他者関係の構えとなる「非所有の所有」とどう重なるのか。

『第三の性』における性愛の図式は、第9回ノートの「フランスのドルドーニュ地方のコンバレル洞窟内の線描画」の例示から読みとることができる。沙枝は洞窟の線描画について、「なぜ原始に人類はこれがかかずにおれなかったのでしょうか」と問う。この線描画には、絡みあった男女の裸体が描かれている。沙枝はこの線描画が、「存在の不安」につきあげられたために描かれたのだと考える。沙枝は性愛において「存在の不安」が、「異性によってとらえられた肉体の表現性」が、「とりかえしのつかない単独存在の崩壊」となり、「性が、異性の肉体を直接的な媒体にしてくりかえし自己疎外をあらわしてしまう」かなしさから引き起こされるようだと推し量る。また、その線描画は、「たがいにとらえあった表現行為性が、もやもやとした心的な裸形となって、他者の内部で変形させられることを自己へ奪回せんとするかのよう」であるという。肉体を伴うような性愛は、言語による伝達とは異なり、私たちの意図を超えた自己を表現する。そして、意図を超えた表現の解釈は他者に委ねられる。他者の解釈は、前節で確認したように、エロスを内的動機として、性愛は他者に接近したい親和性と、他者を私のものにしたいという加害性を紙一重に現象させるのである。性愛関係が、他の関係性では生じないような、理解しがたい事態を私たちに生じさせることには、思い当たる人も多いただろう。沙枝はそうした性交渉における、自己表現の不可能性、もどかしさを、原始の人類も共有し、それを線描画として表現していたのではないかと言うのである。

また、沙枝は子供を出産後、「彼個体の基準となっている概念的単独性と、孤独な魂としてあらわれた個体と、わたしが子供を生んだあとに感じているもはや性を卒業したものとしての単独志向」に「ふくまれる誤謬について語りあいたい」という想いから、「一緒に仕事をしてこれが何かを表現しましょう」と彼に対話を求める。なぜ、それらは誤謬なのか。それは、夫と沙枝に各々生じる「概念的単独性」「単独志向」は、各々の意識によって抽象化された性の経験であるからだ。性をめぐる行為は共同作業であるにもかかわらず、「単独」に処理することは、共同作業を放棄することになるため「誤謬」なのである。

私自身の意図を越えて他者に伝達されるために、私自身が疎外されるという矛盾を前提にしたコミュニケーションを具象化させることの意図は、「存在の回復」にある。文字のなかった時代において、絵画も「語る」手段の一つであったろう。そう考えるならば、性交渉の線描画は抽象化された性の体験を「語る」ことによって把握しなおそうとする試みだとい

える。先述したように、「語る」こと、「語り」を聞くことには、個体の経てきたさまざまな体験を、まだ見ぬ他者へと引き継ぎ、痛みを昇華する意味があった。また、個々人が「疎外」を回避する自己の措定の様相は「非所有の所有」であった。つまり、他者の論理に依拠しない形で自己の抽象化された性を語ること、もしくは抽象化されたものを自身によって再発見することが、「存在の回復」への道筋なのである。

沙枝の言うように「存在の不安定さ」を「性の交換が現象させる」のなら、ひるがえって、性愛は人間の存在の不安定さという痛みを昇華しうる可能性も秘めている。すなわち、性愛は、存在の不安定さから、実存を解放する可能性を秘めているのである。先述したように、森崎は女の言語や感覚の革新には個々の人間が具体的にふれてゆくことが重要だと述べていた。具体的にふれてゆくこととは、どのような行為なのか。次節において、沙枝と律子の対話形式から明らかにしていく。

### 第三章 『第三の性——はるかなるエロス』における「存在の回復」の思想

第一・二章を通して、森崎の性愛論の基本的な考え方を明らかにした。それは、他者への親和と加害が合わさってはじめてエロスが現れ、エロスを探究していくことが「存在の回復」の過程となることであった。本章では、このような視座に立つことで、『第三の性』の文体が、「はるかなるエロス」を探究する構図になっていることを、明らかにする。第一節では、二人の交換ノートの往還が、律子の存在の回復の過程を描いていることを明らかにする。第二節では、第 31 回目のノートに着目し、産の思想の核心部が未来に懸けることであると明らかにする。

#### 第一節 交換ノートという形式

なぜ沙枝ではなく、律子に注目するのか。これまで本稿は、沙枝／森崎の語りを中心に性愛論を辿ってきた。沙枝の語りのみに注目すると、森崎の性愛論の射程は異性同士の関係を想定するにとどまる。だが、もしそうであるならば、交換ノートの対話の相手は異性でよいのではないだろうか。同性である律子に対話の相手としたのは、森崎の性愛論は両性の関係にとどまらず、普遍的な人間関係を対象としているためではないのか。よって、本節では、交換ノートにおける律子の言葉の在り方の変化に着目し、沙枝との対話によって他者を「所有」しようとする言葉から、自己を「表現」しようとする言葉へと止揚していく過程を明らかにしたい。

はじめに「所有」の言葉について確認する。第二章で確認したように、所有とは、他者を自己に同一化しようとする性の側面であった。律子の「所有」はどのように働いているのか。沙枝からの交換ノートの誘いに対して律子は普段の自分を顧みて、「(病との) 対話をこころみようともしないでやりすごしている」<sup>26</sup>と述べ、病、すなわち「自己条件」<sup>27</sup>と向き合うこ

<sup>26</sup> 森崎和江『第三の性——はるかなるエロス』、三一書房、1965年、9頁。

<sup>27</sup> 同上、143頁

とを放棄していると告白する。沙枝の「遊びを呼びさましてもらいたい」<sup>28</sup>という要求に、律子は病の重い身体を嘆きつつ、「でもね、遊びたいと思います。子どものように全部を投げ入れて一つの色になりたい」<sup>29</sup>と誘いを受ける。この時点では、二人は互いの願望を互いに押しつけあっている状態である。このように考えると、一見、二人は同じ視点から交換ノートを開始したように思える。だが、今村<sup>30</sup>が指摘しているように、「病気もこう十数年にもなってくると、沙枝さんのように神経質にはなれなくなる」<sup>31</sup>と、二人の病にたいする距離感の異なりを見せる。そしてそれは、「生を享受できる沙枝」と「死に接近する律子」<sup>32</sup>という分断に連なっていく。だが、分断が生まれるということは、互いが自己条件と向きあえているということの証左でもある。律子は第4回ノートで「いいかげんに、小児的擬態をすてたらどうだ！」とある男性にどなられる。小児的擬態とは、「わたしにはわたしなりのいいぶんもあるの」<sup>33</sup>と、病のために「一人の女としての諸要素を開放できずに今日にいたっている」<sup>34</sup>ことを「逃げ口上」にし、自己条件から目を背ける律子の態度への指摘である。それを受けて沙枝は、「近所のおばさん」たちと行楽した際に、彼女たちは、「年は六十でも心は十八」とやたらにはしゃいでいたが、帰り際にどんな唄をうたっても行楽で感じた喜びを的確に表現できずに、沈黙が流れたというエピソードを持ち出す。彼女たちは「すでに知らざりし自己の限界がなんであるかを知ったにもかかわらず」「自己疎外の現実に対決することない年齢の積み重ね」が「カマトト的成熟と本質的未成熟の断絶状況」にあるのだと述べる。これは暗に律子への批判となっている。なぜなら律子もまた、彼女たちのように、自己疎外、すなわち自己条件から目を背け、現実に対決することなく今日に至った女の一人であるからだ。自己疎外を疎外として受け止めないということは、第一章で述べた「被所有」状態である。律子は沙枝の批判を、「でもね、わたしは女だから、女に生まれているんだから、その肉体の条件をぬきに考えられない」と、女を自分の肉体でもって経験しないことには、「自己疎外の現実」に対決できないと反論する。そうした「性を生きることから遠ざかるコンプレックス」に「いやなんでもないよという表情」をしながらも「いったい性はなんなのだ、こんなに卑屈なものなのか」<sup>35</sup>と、いわゆる「私ども婦人は」といった社会に流布する男女平等をうたう主義・主張では救われない自身がいることを自覚する。第二章で確認した

---

<sup>28</sup> 同上、6頁。

<sup>29</sup> 同上、10頁。

<sup>30</sup> 今村純子「沈黙における対話の可能性」、京都大学文学研究科21世紀COEプログラム「新たな対話的探求の論理の構築」

研究会、2004年2月、[http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/dialog/act9\\_imamura.html](http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/dialog/act9_imamura.html)

<sup>31</sup> 同上、8頁。

<sup>32</sup> 今村純子「沈黙における対話の可能性」、京都大学文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」「新たな対話的探求の論理の構築」

研究会、2004年2月、[http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/dialog/act9\\_imamura.html](http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/dialog/act9_imamura.html)

<sup>33</sup> 森崎和江『第三の性——はるかなるエロス』、三一書房、1965年、同上、18頁。

<sup>34</sup> 同上、19頁。

<sup>35</sup> 森崎和江『第三の性——はるかなるエロス』、三一書房、1965年、31頁。

ように、第七回ノートでは律子の問いから始まる沙枝の性感を養ったエピソードが語られるが、そこには不特定多数の異性がたえず存在していた。律子はそんな沙枝の語りは「直接・間接に異性世界との交渉をとおして、即自な性の感覚や意識は変化するといっている」ように聞こえるといい、「どうも奥歯にものがはさまっている感じ」と指摘する。つまり、直接・間接の交渉を通さずとも、性感は育まれるのだと言いたいのである。だが、依然として、「性のしくみ」には「握りあった手があるじゃないか、といわせる何かがある」<sup>36</sup>と律子は考える。そして、沙枝に「あなたは分っているんでしょう？生んだあなたには分っているんでしょう？」<sup>37</sup>と迫る。こうして、「ひとつの色」になりたいという同一化の願望から始められた交換ノートは、律子の「所有」の言葉、すなわち、他者に一方的に押しつける言葉を現象させていく。

では、どのようにして「所有」の言葉は「表現」の言葉に止揚していくのか。先ほど確認したように、「所有」の言葉は「自己条件」から目を背ける態度から生まれるものであった。そのように考えるなら、「表現」のことばは、「自己条件」と向き合うことによって生まれてくるといえる。律子は第10回ノートで自身とは真逆の立場の者、すなわち、「性」を売って生きる道を押つけられたからゆきさん<sup>38</sup>の視点から性を考えることによって、「ゼロ点マイナス価値をくつがえす出発点であるような、女の自立した「性」への「手がかり」や「暗示」を得ようとする。だが、ここで律子は「からゆきさん」という他者を通して自身の性を理解しようとしている点で、「自己条件」に向き合う態度を曖昧にしている。その点を沙枝は見抜いてか、「女たちの性欲」が「久遠の女」という一般性と「売笑婦」という特殊性に分離され、抽象性という「自然体」・「静止的基底」に限定されていると第11回ノートで語る。世間に漂う「女たちの性欲」という観念のなかには、等身大の「女」は存在しないのである。それを受けて律子は「あなたの話だって、分りもするし分りもしない、というところがあるの」と綴る。ここで初めて律子は、率直に「分りもしない」と沙枝にぶつける。そして、「性のしくみに加担できないことを嘆くのは当然」であり、そうならば男が女を買うように、「男」のほしい女も買えばいい」と先ほどの性欲の抽象化を利用すればよい、と述べる。自己の性と向き合うという点で、「ようやくわたしは自分を全面的に語りだすその糸口をつかんだといっている」と、律子は「自己条件」に向き合いつつある様子を見せる。一見すると「自己条件」に向き合うことができているようだが、ここで欠けているのは他者の存在である。女も同様に男を買えばよいという発想は、女たちの性欲を抽象化し、分離させる社会構造を逆利用するということである。

女の性はただ男を買うような消費の手段をもってすれば解放できるものか。そうではない。沙枝はそこに性の思想を持ちこみたいと考える。第二章第三節で確認したように、それゆえ両性は性愛的な次元での対話を持ちあうべきであり、そのエネルギーが性の諸問題を

---

<sup>36</sup> 同上、48頁。

<sup>37</sup> 同上、48頁。

<sup>38</sup> 同上、69頁。

打ち破るようになるはずだという。これを受けて律子は、強烈な分断を意識する。なぜなら律子には沙枝の語りの前提となるような経験がない。情欲のイメージを対象化できない「かなしみ」は「おそらくあなたには分らない。子供を生んだあなたには分らない。性をその対象者と共に生き得る沙枝さんには分らない」と分断を明確にする。このように語ることを通じて律子はようやく自身が恐れていたものを、病という「自己条件」を言い訳にしていた理由を自覚する。「病」を言い訳にしていたのは、「ノートに向かうときにみえてきた自分の芯が、どんなに苦痛なものかがわかることの不安」であり、「存在欲がどんなに底しれないふかさであるか、また女のそれがこの世でどんなに閉ざされていたものであるかに思いあたるのがこわかった」からである。ここからわかるのは、「自己条件」をもって生きざるを得ない自身を守ろうとする意識が、自己を表現することばを遠ざけるということである。他者との関係のなかで見えてくる自身の弱さを守ろうとする意識が他者を同一化しようと働いてしまう。律子はそうした弱さを自覚し、あらたな自身の性の見え方を追究せんばかりに言葉を綴る。

生んだ体験を基にして話す沙枝に「生むとはそんなにご大層なことなのか？夜のつぎには朝がくるといった自然じゃないか。なぜそれがわたしを卑屈にする。なぜ疎外するのか」と、沙枝をふくめ「生んだ女」たちの傲慢さを糾弾する。沙枝は、「あなたからそのことが話されるのを待っていました」<sup>39</sup>と、律子の糾弾、ならびに「生まない女たち」の告白を「生んだ女」として受けとめる。「生んだ女」と「生まない女」の間に横たわる「真空地帯」は、両者が「まだ本質的な交流を持ちあっていないことからでてくる」もので、その原因はそれぞれの女たちが「自己条件を認識して、その真空地帯」を生んだ「支配権力の同伴者の殿堂の体質を、うちこわすことを共有しあっていない」ためだと沙枝は語る。これをうけて律子は、「支配権力の同伴者の殿堂の体質」を「燦然とした聖家族像」であると解釈し、それは「幸福のシンボル」だと述べる。律子は、そうしたシンボルを羨むのは、「貧者ほど金持ちが好きで金持ちを恐れへいつくばる心理と共通して」おり、貧者には「一方的な力ばかり」が働いているわけではなく、「貧者みずからが作りだす」「あの真空地帯は貧者の自慰の煙幕でもあるらしい」、そうした「わたしの意識へもぐりこん」でいる「自慰の煙幕」は、「要はアマエ」なのだと述べる。ここでは、森崎が批判した、積極的な権力を立ち上げうる「非所有の私有」という反権力的態度と、律子の被権力的立場の自覚が重なっている。それは、世界から疎外された自己が疎外されている条件に絶対的に依拠することを通して、あらたに反権力的態度が積極的な権力を立ち上げてしまう危険をはらんだ状態である。律子は沙枝に「わからない」と率直に述べることで、沙枝の同一化を拒否しながらも、「貧者みずから」が「真空地帯」をつくりだす、つまり被権力者も権力関係を支えてしまっている部分があるのではないかと考える。

では、どのようにして権力と被権力の二項対立を打ち破るのか。律子はこれまでさまざまな既存の主義・思想を読み漁ったが、そこには自身の存在に一致するものがなかった。そし

<sup>39</sup> 森崎和江『第三の性——はるかなるエロス』、三一書房、1965年、139頁。

て、沙枝へ「分からない」と同一化を拒絶することを通じて、そのような欠如感が「満ちるということは湧かせることなんだと」気づく。沙枝が「押しつけてくる主義くさいものが何であるか」というと、「それはどうにもならぬ人間のあぶらなんだ、人間そのものが現実におしまげられずに生きるためににじみ出させる分泌物なんだ。思想とはそんなものなのか」として、女たちがそのような思想を湧かすことができぬことが疎外である、と気づかないところこそが、「もっとも深い疎外」であると思ひ至るのである。このようにして、自身が社会に根ざす言葉を持ちあわせていないという欠如感の自覚と、自身の存在欲を満たそうと言葉をつむぐ律子の姿からは、病という「自己条件」を理由に自己と他者に向き合うことから遠ざかっていたころの「所有」の言葉から、沙枝との関係を経て見えてきた自身の「存在欲のふかさ」を満たそうと働く自己「表現」の言葉への止揚が見受けられる。自身が位置づけられている既存の秩序に「おしまげられずに生きる」ために「人間のあぶら」、つまり人間の欲動を「湧かせる」ことが、「存在の回復」である。先述したように、「語る」ことは「存在の回復」のモチーフを萌していた。「語り」が「存在の回復」に向かっていくためには、他者との関係で見えてきた、これまで知らなかった私の存在に気づき、そうした私に根ざした言葉で語っていくことが、「湧かせる」ということなのである。律子は自己条件と向き合い、沙枝主張に率直な気持ちをぶつけることを通じて、自身のなかから主張を湧かした。これは律子が沙枝とのやりとりを通じて、所有/同一化を拒否し、自己表現/個別化を成したのだと理解できる。このようにして、二人が共同創造したのは、森崎の性愛論に通ずる対話・永久革命のモチーフであった。

## 第二節 性の思想から産の思想へ

……息するの、もう、やめようかな。いやまだだな。しんばいしなくてもいい、生きてみせるよ。……息するの、もう、やめていい？いいでしょう？さようなら。さようなら。さようなら。

以上は、律子の最期の言葉である。「病室にひびきわたった」律子の声が「消えのこっている」ときには、律子はもうこの世にいない。こうして沙枝と律子は、交換ノートを通じて、また死の直前まで互いの言葉を未来に懸ける形で対話を育んだ。交換ノートの往還は、他者にことばが届くかどうか分からない、完全に届くということはないであろう、という不可能性を前提としている点で、性愛と形式を一にする。森崎はなぜ届く宛てのないノートを沙枝に書かせたのだろうか。本節では、『第三の性』の周辺テキストを適宜参考にしながら、宛てのないノートが律子もまた「産の担い手」であったことを示唆するという点を明らかにする。

まず、第30回ノート、律子の最後のノートを確認したい。このノートはこれまでで一番律子に活気があるといつてよい。「生きる自信ができて入院したベッドの上で、あなたの声

いただきました」。律子の死から考えれば、このノートは沙枝の言うように「なぐさめ役はげまし役」を買った律子の、最後に振り絞った気力の産物である。だが、終盤につぎのようなことばがある。「生きて、そしてあなたにぶっつかってあげる」。すでに参照したように、たしかに律子は最期まで沙枝にことばをぶつけた。残した声よりも先に、律子の身体は死へ飛び込んだ。果たして死は律子の「表現」の終わりを意味するのか。律子によって何がはじめられ、沙枝はこの命懸けのことばに対して、いかに応えたというのか。

律子の死がどのような意味を持ちうるか検討するために、沙枝の考える「産む」ことを確認したい。先述したように、森崎にとって「産む」とは自分の外部と関係を持つということであった。沙枝が出産の経験を夫と共有しようと迫ったというエピソードは既にふれたが、ここでは「産む」という現象を沙枝がどのように捉えているのか、という観点から再び取り上げたい。沙枝は分娩をこうふり返る。「わたしは十分に知っているんです。分娩の快感を。肉体をしぼる苦痛にも似た快楽を。それが生命の生産であるとともに、死へすれすれになっていくところの性の自己消費的な自己性愛の高潮であることを」。沙枝にとって産むことは、第二章第三節で確認したように、夫と二人で共有したい、せずにはおれない経験であった。一人で産んだ、私が産んだと言わんばかりの出産の快楽を独占したくないために、夫に共有しようとしたのだが、なぜ「死へすれすれになっていくところの性の自己消費的な自己性愛の高潮」とまで表現されるのか。それは、「産む」ことは心身が限界まで苦痛に晒されるからだ。この感覚は、死への衝動、タナトスともいえる。母体が死へと向かい、胎児は生へと向かう。タナトスとエロスの究極の拮抗が「産む」には現象している。また、第二章第一節において、「麦畑」はエロスの原風景になっていたが、第29回ではこの「麦畑」には「死」のイメージも共にあることが語られる。「麦畑」からは殺された子供が時々見つかると、それが沙枝に「緊張したしびい感覚」を張らせ、その感覚が「風物と対応することを許される感じ」を常に持たせたという。その緊張関係が、沙枝に自然風物への愛を育ませたと語る。この心象風景からもわかるように、沙枝にとってエロスとタナトスは表裏一体なのである。このように解釈するならば、死へと向かいながらも、エロスを湧かせた律子の姿は、「産む」ことの内的な運動に着目する点で、まさに自己の言葉を「産」んだ人間の一人であった。

そしてもうひとつ、「産む」ことは何かを“新しくはじまること”を意味する。沙枝は生まれた赤子を「夫とその瞬間まで持ちあおうとしていた連続性——その架空な共有の世界と、その生まれでた生命は全く無縁な孤独さ」をもつ存在と称する。つまり、沙枝や夫が意味づけられた世界にいるのに対し、そうした意味とは全く切れた存在として赤子は存在するのである<sup>40</sup>。ゆえに生まれでた生命は、「孤独な魂」なのである。全くの「無名」の存在、

---

<sup>40</sup> 森崎は、「人間が一個の存在として誕生した姿を、他者がまるごと認識するのは、ほとんど不可能です」としながらも、「しかし、私には人間の本質というのか、魂というのか、個体の存在の重さは、新生児も生産世代も老年期も男も女も同じである、という想いが抜けません。そして、その最も根源的な質をためらいなく表現しながら生きている時は、誕生後のいくばくかの間だけだ、と感じています」と述べる。なぜなら人間は、「ル



しかし、それはただちに「架空な共有世界」、すなわち沙枝と夫が持ちあおうとした二人の意味世界によって捉えられてしまう。そこには、これまで論じてきた名づけの加害がはたらいってしまう。だから沙枝は「まちがったらごめんね」と「涙を流し」、「あずけられた生命に対する恐怖」を感じるのである。では、“新しくはじまること”に懸けるのが「産む」ことであるならば、律子は何をはじめたというのか。

かつて森崎に産の思想を担うのは（物理的に）生んだ女だけではない<sup>41</sup>、と言われた上野は「わたし」という一人称に時間という次元を持ちこんだのが、「複数のわたし」であり「あなた」だとしたら、子を産んだか産まないかに大きなちがいはない。」と述べ、「生んだ女も産まない女も、産めない男も、未来への責任はまぬがれない」と考えを新たにしている<sup>42</sup>。つまり、産の思想で重要なのは、未来へつなぐ自己と、未来に生きる他者とのつながりを自覚することである。

したがって、律子は未来に生きる沙枝にことばを託したという点で”新たなはじまり“に存在を懸けたといえる。さらに、第31回ノートは、律子のことばを託された者の責任として、沙枝は語るのである。

律子さん、わたしは生んだ女へ放たれつづける不信をにぎりしめて、なおさしむかひの孤独的性愛にもがきながら、また生へかえます。

なんとも重い足どり。律子さん、あなたはもういない。

託された者の責任とは、すなわち、「生まなかった女」とともに生きるということだ。それが、「生んだ女へ放たれつづける不信をにぎりしめ」ということだ。森崎にとってことばによる表現は不完全である<sup>43</sup>。だからこそ、「人間たちのふかぶかとしたいとなみのなか

---

ールを作って相互規制しつつ生きるしかない」からだ。（森崎和江『いのちを産む』弘文堂、1994年、44-46頁。）

<sup>41</sup> 森崎は上野千鶴子との対談において、「生む」行為が「生んだ」ものに限定されないことを述べている。「人間が生きていくということは、種を残すことではなく、未来をはぐくみたいという感情にあると思うの。私はその感情を、社会的父性とか、社会的母性とかと呼びたいの。かつての母性をこわして。」ここで「種を残すこと」は物理的なレベルでの出産を指していると考えられる。「人間が生きていく」という営為が動物的本能による「種を残すこと」ではない。かつての母性をこわすということは、生んだ者だけが生む行為の主体として限定されてしまう意味での母性をこわすということを言っている。森崎にとっては社会的なレベルでの未来を残すことが生むということなのである。「私は産まない女」であるから「産の思想化」を担えないと述べる上野に対して、「産まんかったら対の思想化を感じなくていいって言ったら、私怒っちゃう。泣く。そういうことと違う」と言い、生むという営為が生んだ者だけに還元されてしまうことを批判する。

<sup>42</sup> 上野千鶴子「産の思想と男の一代主義 森崎和江『第三の性——はるかなるエロス』『くおんな』の思想』、集英社、2013年。

<sup>43</sup> 「私はあの朝、はじめてことばというもののまずしさを知ったのである。絶望というも

で「まだことばになっていないひろい領域のあることに対する、いとしさ」があり、「言語化しがたいものを抱きつづけているのを感じたいという思いを抱く。律子の肉体から絞り出された最後のことばは「首尾一貫したみごとな死へのとびこみ」であった。律子の消えのこった声、言語化しがたいものを抱くことが、託された者の責任なのである。

以上の点が森崎の産の思想へと結実していく。『闘いとエロス』(1970年)から「産む」をめぐるエピソードを参照したい。語り手の契子の再婚相手・室井／谷川が流産した契子／森崎に「ぼくたちの子どもを産もうねえ」と述べるのに対して、契子はお互い前夫・前妻の間に子どもがいるのに、どうしてまだ「ぼくたちの子どもを産もう」と言うのか、もう「ぼくたちの子ども」がいるではないか、と述べる。これはどういう意味か。室井にとって、前妻との間の子ども、契子の前夫との間の子どもは「ぼくらの子」には当たらない。なぜなら、それは自分たちの交わりの結果ではないからだ。自分と交わった結果こそが、「ぼくらの子」となりうると室井は考える。しかし、契子は反論する。「生みたくない、のではないのよ。もう生んでいるでしょう？あたしたち生んでいるでしょう？あなた久子ちゃん生んでいるでしょう？もうあたしたち、生むこと、を知っているのよ、あたしたちは生んだことを、ふたりの手で支えているのよ。なぜ、まだぼくらの子がいるの？」<sup>44</sup>。生むことは、やはり物理的な出産だけを指すのではない。それは、生むということの経験のひとつにすぎない。室井はポエティカルな意味でもぼくらの子を生みたくないのかと契子にせまるが、契子は「詩的ないみでならなおのこと、ぼくらの子を生もうなぞ……生んだからこそよりそっているのでしょ。」と、詩的な意味ではすでに生んでいる、つまり共同創造した、二人の関係から生じる思想・思考はすでに生んでいるのだと訴えている。それゆえに、契子は二人が生むことをすでに知っているものとして捉える。ここにおいて森崎は、一般に考えられる物理的な出産を超えて、思想を「産む」ことと重ねているのである。

以上、第一節と第二節を通して、『第三の性』における律子の存在の回復を検討してきた。ここから、律子は死に接近してはじめて自己表現をなし、自己の存在をこの世に現象させたのだといえる。それは、社会から疎外された者がふたたび社会に、他者とともに生きなおす試みであると考えられる。沙枝は「野垂れ死」を覚悟している点で、自己表現の構えをもっていたのだとも読める。そして、その律子の構えは沙枝によって、第31回ノートを通じて、「未来」に宛てられるのである。病床に臥し、沙枝との関係を経てはじめて自覚した存在欲のふかき、それは現代的にいえば自己承認欲求のようなものであるが、これは独り善がりでは達成されず、他者との分断を意識してはじめてみえてくるものであった。また、それは沙枝も同じであろう。沙枝は律子が身体をかばってあえて元気に第30回ノートで振舞っていたことを彼女の死を通じて、自らの「死をみつめることのできぬ者のこの傲慢」に気づかされる

---

のの味わいをも知ったのだった。自然の表現力の美事さに、人のそれは及びようのないことを、魂にしみとおらせた。」(「朝やけの中で」『匪賊の笛』)

<sup>44</sup> 森崎和江『闘いとエロス』、三一書房、1970年、67 - 68頁。

からである。私たちはこのようにして、すでに失ってからようやく、関係性というものが、未来に懸ける行為であったことに気づくのである。

#### おわりに——存在論的性愛へ

生まれてきたばかりの子供が、公園で埋められる。コインロッカーで死体となって見つかる。そんな事件が起きるたびに、社会は女を責める。擁護する声がある。適切な相談場所にありつけなかったから、彼女には知的障害があったからなど、外的・内的な要因によってそうせざるを得なかった理由がメディアで列挙される。しかし、それだけなのか。子供を殺したのは、私たち一人ひとりではないのか。あの女たちは、私たちではないのか。女たちの、亡くなった子供の沈黙を、私たちはどのように受け止めればよいだろう。

本稿でははじめに、女性の実存の解放、すなわち存在の回復の思想を明らかにすることを問いに立てた。『第三の性』を読み解くことを通じて明らかになった存在の回復の思想とは、まず、「語る」ことを通じて、個々人が持つ痛みを昇華することである。このことは、森崎の聞き書きの実践が提示したことと、沙枝と律子の対話において、律子の「生ま(め)ない女」としての痛みが和らいでいったことから明らかとなった。次に、性愛が不可能性を前提としたコミュニケーションであると自覚すること、そして、その不可能性を超えようと「語る」ことである。そうすることによって、これまで見えてこなかった自己の性の在り方、すなわち、「第三の性」が見えてくるのである。他者をふくんだ自己の言葉を表現していくことが、この社会に自己が根ざしていると実感できるてがかりになり得る。制度のうえで女たちが平等を保障されようが、言説のうえで女のセクシュアリティが保護されようが、依然として「女」は「女」の身体が現わす諸現象を生きなくてはならない。だが、それをさまざまな他者にひらいていくことによって、これまでの「女」の性とは違ったもの、さまざまな

「女」、「男」たちの視点を含んだ性の見え方——単独者では捉えきれない、他者関係がもたらす性の現れ——を、個々人が模索し、創造していくことができる可能性がある。

はじめに述べたように、「主体」がある、という前提が見落としてきた領域に着目するフェミニズムの切り口として、はじめにケアの倫理を紹介した。たとえば岡野八代『フェミニズムの政治学——ケアの倫理をグローバル社会へ』は、これまで忘却されてきた人間の「傷つきやすさ」が他者への応答の責務を生じさせ、そのような個から成る社会形成こそがすべての人間の権利を尊重するという論理を展開する。

今日のフェミニズムが性を語る時、それは独我論的エロスを表してしまう。女が客体化され、消費の対象とされてきた存在であることは確かであり、そうした視線を批判しつづけることはこの先も必要となるであろう。だが、本稿でこれまで論じてきたように、性とは、他者関係によって生まれるものである。つまり、女たちの心身の尊重と保護を論じると同時に、多様な関係における性の見え方を、他者関係によって相対化しながら表現し、固定的な在り方を絶えず否定しつづけることが求められる。存在論的性愛とは、性愛関係においてエロスに私を懸けることである。それは、第二章で論じたように、水遊びのように他愛もないものである。この他愛もなさ、はかなさを性愛関係において生み出すことができるならば、私たちは他者の性を今よりも気遣うことができるのではないだろうか。

小林<sup>45</sup>が指摘するように、現代は生殖技術が発達し、生命誕生に男女の性愛が必要不可欠ではなくなった。それとともに、以前ほど性愛の楽しさを求める若者は減少した。「第8回青少年の性行動全国調査報告」<sup>46</sup>によれば、18歳未満で性的な関心を抱いている者の割合は5割に満たないという。誰かと性的な関係を持つことは、時間と金銭、そして精神的労力が必要となる。それに比べて、YoutubeやTikTokなどのアプリケーションは、無料であり、楽しさを感じるまでにほとんど時間がかからない。また、性交渉もアプリケーションを使うことによって、性交渉のみを目的とするならば、さほど精神的労力も必要なく楽しむことができる。性へのアクセスのしやすさと、性以外の娯楽が満ちている現代では、森崎のように、性とは、産とは何かと問いかけてくる声は聞き取られなくなっていくかもしれない。

だが、この社会で生きていく以上、私たちは他者の手を借りねばならない。私たち一人ひとりには、そうした意味で、他者を受けとめることができる社会を構築する責任がある。他者を受けとめるとは、第三章で述べたように、他者との関係によって、私のなかに、これまでの私が知らなかった私の存在が生まれることに気づくことである。私であって他者でもある者は、胎児だけに限定されないのである。そのような私の意識内に、他者を受け入れる余地をもつことが、「水遊び」をするようなたわむれとなり、他者への気遣いと私自身への気遣いが生まれるのだろう。そうした性愛が、私と他者の関係をあらたに産んでいくのである。

---

<sup>45</sup> 小林瑞乃「〈ひらかれた生〉を求めて——森崎和江の言説にみる共生への模索について——」『総合文化研究年報』、第21号、2013年、67-83頁。

<sup>46</sup> 日本性教育研究会『「若者の性」白書第8回青少年の性行動全国調査報告』、小学館、2019年。

こうした森崎の思想は、性愛の先にありうる“はじまり”が絶望と受け止められてしまう社会にとって、一石を投じるはずである。

#### 参考文献

赤川学 『セクシュアリティの歴史社会学』、勁草書房、1999年。

荒木菜穂「現代フェミニズムにおける「性の政治」再考——「女性による性的快楽の追求」への多様なまなざし——」『女性学年報』、日本女性学研究会「女性学年報」編集委員会、第25号、2004年、137-158頁。

——「ポストフェミニズムの時代における「女子」とフェミニズム」『女子学研究』、vol.10、甲南女子大学女子学研究会、2020年、1-9頁。

井口裕紀子「ハッシュタグで繋がるフェミニズム：第四波フェミニズムにおけるソーシャルメディアとインターセクショナリティ」『同志社アメリカ研究』、第55号、2019年、57-74頁。

今村純子「沈黙における対話の可能性」、京都大学文学研究科 21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」「新たな対話的探求の論理の構築」研究会、2004年2月、[http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/dialog/act9\\_imamura.html](http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/dialog/act9_imamura.html)（2021年9月13日参照）

上谷香陽「ガール・ジンからみる第三波フェミニズム——アリソン・ピープマイヤー著『ガール・ジン』を読む」『文教大学国際学部紀要』、第24巻1号、2013年、1-16頁。

上野千鶴子『女という快楽』、勁草書房、1986年。

——『対話篇——性愛論』、河出書房新社、1994年。

——『「セクシュアリティの近代」を超えて』、井上・上野・江原編 2009『新編日本のフェミニズム 6 セクシュアリティ』、岩波書店、1995年。

- 『差異の政治学』、岩波書店、2002年。
- 『ケアの社会学——当事者主権の福祉社会へ』、太田出版、2011年。
- 「産の思想と男の一代主義 森崎和江『第三の性—はるかなるエロス』『〈おんな〉の思想』、集英社、2013年。
- 岡野八代『フェミニズムの政治学——ケアの倫理をグローバル社会へ』、みすず書房、2012年。
- 加納実紀代「交錯する性・民族・階級—森崎和江の〈私〉さがし」『文学史を読みかえる』七巻「リブという〈革命〉—近代の闇をひらく」、インパクト出版会、2003年。
- 菊池夏野・河野真太郎・田中東子「分断と対峙し、連帯を模索する—日本のフェミニズムとネオリベラリズム」『現代思想』、青土社、第48巻第5号、2020年、8-25頁。
- 貴戸理恵・鈴木涼美「“キラキラ”と“その後”のためのフェミニズム」『現代思想』、青土社、第48巻第5号、2020年、290-301頁。
- 小林瑞乃「戦後思想史における森崎和江：〈対観念〉と〈いのち〉の言説をめぐって（戦後地域女性史再考）」『年報・日本現代史』、第18巻、2013年、109-141頁。
- 「〈ひらかれた生〉を求めて——森崎和江の言説にみる共生への模索について——」『総合文化研究年報』、第21号、2013年、67-83頁。
- 田川夢乃「「私のお客さん」と築く親密性 --フィリピン、M市のカラオケパブの事例から」『コンタクト・ゾーン』、京都大学大学院人間・環境学研究科文化人類学分野、2019年、95-121頁。
- 田中東子「フェミニズムが「まあまあ」ポピュラーになりつつある社会で」『早稲田文学』第10次第20号、2020年、118-127頁。
- 田中亜以子「ウーマン・リブの「性解放」再考——ベッドの中の対等性獲得に向けて——」『女性学年報』、日本女性学研究会「女性学年報」編集委員会、第28号、2007年、97-117頁。
- 『「感じさせられる女」と『感じさせる男』—セクシュアリティの二枚舌構造の成立』、小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』、京都大学学術出版会、2014年。
- 茶園梨加「森崎和江『第三の性—はるかなるエロス』にみる対話の可能性—交換ノートという形式」『脈』、第91号、2016年、60-67頁。
- 中真生「生殖と他なるもの」『神戸大学文学部紀要』、第41号、2020年、19-52頁。
- 日本性教育研究会『「若者の性」白書第8回青少年の性行動全国調査報告』、小学館、2019年。
- 羽瀨 一代「女性の性欲言説の変遷」『ソシオロジ』、45巻2号、2000年、103-117頁。
- 橋本紀子・池谷・田代美江子編『教科書にみる 世界の性教育』、かもがわ出版、2018年。
- 深海菊絵「ポリアモリーという性愛と文化 愛をいかに自由に実践するか」『現代思想』、青土社、第49巻第10号、2021年、50-59頁。

ブレット・ド・バリ「二つのことば、二つのところ—森崎和江と言語行為の政治—」『思想』、第 886 号、1996 年、114-145 頁。

牧野良成「フェミニズムの歴史化における〈波〉区分を問いなおす 日本語圏では、なんのために、どんなふうに使われたか」『女性学年報』、第 41 巻、2020 年、41-62 頁。

水溜真由美「サバルタンは連帯することができるか」『情況 第二期』、情況出版株式会社編、第 11 巻第 5 号、2000 年。

——「第三の性」『戦後思想の名著 50』、岩崎稔編、平凡社、2006 年。

——『「サークル村」と森崎和江—交流と連帯のヴィジョン』、ナカニシヤ出版、2013 年。

元橋利恵「新自由主義的セクシュアリティと若手フェミニストたちの抵抗」『架橋するフェミニズム：歴史・性・暴力』、2018 年、25-36 頁。

森崎和江『非所有の所有一性と階級覚え書』、現代思潮、1963 年。

——『第三の性—はるかなるエロス』、三一書房、1965 年。

——『闘いとエロス』、三一書房、1970 年。

——『ははのくにと幻想婚』、現代思潮社、1970 年。

——『異族の原基』、大和書房、1971 年。

——『匪族の笛』、葦書房、1974 年。

——『海路残照』、朝日新聞社、1981 年。

——『いのち、響きあう』、藤原書店、1998 年。

森崎和江・中島岳志『日本断層論—社会の矛盾を生きるために』、NHK 出版新書、2011 年。

結城正美「森崎和江インタビュー “生む・生まれる” ことば：いのちの思想をめぐって」『文学と環境』、文学・環境学会、第 14 号、2011 年、5-16 頁。

Alexandra May Hambleton Consuming Pleasures: Women, Sexuality, and Postfeminism in Post-Growth Japan、東京大学大学院学際情報学府博士論文、2017 年（未刊行）。